

かぜ  
疾風の中の詩人：Coleridge と Shelley の  
‘Aeolian Harp’ を読む

箭 川 修

ロマン派の二人の詩人、コールリッジとシェリーの作品を検討するのが今回の眼目であるが、最初に、今年度の公開講義のテーマ、「英語で詩を読む」とはどういうことなのかを自分なりに考えてみたい。「英語で詩を読む」とは：

1) 英詩が持つ音楽性を理解すること。

・音楽性はリズム、音色などから構成される。日本語の俳句には、5・7・5というリズムがあり、口を大きく開いて発声される音や小さく開いて発声される音によって音色が与えられる。英詩には、音節の強弱からなるリズムがあり、母音や子音によって構成される音色が認められる。

2) 日本語で詩を読まないこと。

・英語の単語が持つヴィジュアルなイメージを可能な限り具体的に頭に思い浮かべる。名詞はもちろんのこと、動詞、形容詞、副詞などについても、基になる名詞があればその具体性を再現してやる。

2') なぜ日本語に訳して理解してはいけないのか？

・最大の理由は語順が異なること。語順が変われば情報の出方が変わる。イメージが出現する順番が変われば、詩の世界が変わる。これについては再び俳句を例に考えてみる。取り上げるのは、有名な芭蕉の作品。

A 荒海や 佐渡に横とう 天の川

A' 天の川 佐渡に横とう 荒海や

俳句は 5・7・5 で構成されるため、最初の 5 と最後の 5 を入れ替えてもリズムは崩れず、情報内容にも変わりはない。変更されたのは情報が出現する順番。これによってどのような事態が生じるのか。

この俳句で重要なのは視線の動き。荒海という近景、佐渡という中景、そして、天の川という遠景が順に提示されるが、これにより、視線は徐々に下から上へと向かう。詩人—また読者—は目前にあって圧迫感を感じさせる荒海から、広大な夜空にかかる天の川に向けて解放されていく。逆のパターンの場合、読者は次第に狭い所に押し込められていくことになる。同じ要素を用いながら、順序を変更するだけで、描かれる詩的世界が全く異なってしまうことが理解できる。

本題の Coleridge の *The Eolian Harp* の検討に入る。

最初の段落では、詩人の周辺の景色が描かれる。ここでも可能な限り、英語の語順に従って、ヴィジュアルなイメージを頭の中に配置していくことが望ましい。先に俳句で検討したことを参考にすれば、詩人は自分に近い所（詩人にもたれかかる恋人 Sara）から記述を始め、次第に外に（小屋から雲へ、宵の明星へと）その視線を向けていく。詩人はさらに嗅覚（向こうの豆畑）を、最終的には聴覚（遠い海の音）を導入し、視覚の捕捉範囲外にある情報までを提示する。詩人は、自身を起点とし、意識を徐々に拡大させながら、周辺の状況を記述していく。

第 2 段落は一前段の最後の音（聴覚）に対する言及に呼応するように—‘that simplest lute’ という表現で「風鳴琴」を提示する。風鳴琴は Aeolian Harp とも Eolian Harp とも記述されるが、Wind Harp と呼ばれることもある。詩中には Placed length-ways in the clasping casement という表現も登場し、これが窓枠に嵌め込まれたものであることが明らかにされる。〔講

義では音楽性の理解とヴィジュアルなイメージの構築の助けとして Wind Harp の映像および音色を経験してもらった。] この第 2 段落の最後で、詩人は the mute still air / Is Music slumbering on her Instrument と表現し、音の有無について興味深い洞察を提示する。無音は、音の不在ではなく、潜在的な音楽が休眠している状態、と詩人は語る。

第 3 段落に入り、詩人は妙な思いつきを披露する。詩人は自らを Wind Harp に擬え、音を奏でる Wind Harp と様々な想念が頭に浮かぶ自分は同じなのではないか、と考える。休眠していた潜在的な音楽が風を受けて目を覚ますように、休眠していた詩人の思想は、何かの影響を受けて、突如として詩人の頭の中を巡り始めることになる。

第 4 段落に入って詩人は、Wind Harp の音楽が風によって奏でられるのであれば、人間に知的活動を行わせるのは one intellectual breeze であろう、と考える。しかしながら、こうした one intellectual breeze に Coleridge は At once the Soul of Each, and God of All と付け加えている。そして、この考え方は一Pantheism、汎神論に言及していると考えられ一伝統的なキリスト教思想からは若干逸脱したところにあると解釈されてきた。

詩行は最終連に入り、Sara を一そうした Coleridge の思想的傾向を穏やかに諫める一キリスト教への信心の深い恋人として回帰させ、詩人は若干の後ろめたさを残しつつ、自分に恋人を含む様々な至福を与えてくれた神、キリスト教的な神に感謝を捧げることで幕を閉じる。

この詩は、恋人 Sara に対する求愛の詩である、という解釈もあるように、詩人が抱いた思想的な部分は必ずしも肯定的には描かれない。とはいえ、詩人が自らを Wind Harp に喩えながら展開しようとした思想こそが Coleridge の哲学的本質を支えるものとなっていると考えられる。

さて、Coleridge の詩は、今回のタイトルで「疾風」と表現した風とはそぐわず、むしろ「微風」と呼ぶべきかもしれない。「疾風」という表現は Shelley の *Ode to the West Wind* にこそ相応しいように思われる。

第1連から西風が登場するが、重要なのは、何と言っても、第1連の最終行で提示される Destroyer and Preserver という役割である。西風は冬という死の季節の先ぶれとして機能すると同時に、実った種子を地中に眠らせ、春に備える役割も果たす。

第2連は西風の空に対する影響を、第3連は西風の海に対する影響を描写していく。第4連に入り、詩人は西風と自らの関係を語り始める。最初第1連に登場した枯葉に、次に第2連の空に、さらには第3連の海に自らを投影してみせる。しかしながら、ここで重要なのは、その投影が差異の意識に貫かれていることである。

詩人は、「子供の頃のように…なれば、…このようにお前に挑みはしなかつたらう」と語り、それまで生きてきた年月が自らを不自由な存在にしてしまった、という思いを告白する。西風との差異、あるいは西風を受ける対象との差異の意識が、最終連の詩人の願望 Make me thy lyre へと帰結する。詩人は自らを森と同じ位置に置きつつ、西風の The tumult of thy mighty harmonies を受けて a deep, autumnal tone, / Sweet though in sadness を奏でる Wind Harp になりたい、と語る。

しかしながら、詩人の願いはただ音楽を奏でたい、詩を歌いたい、というところに留まるものではない。詩人の思想は、the dead thoughts と呼ばれ、第1連2行目の the leaves dead と呼応する。そして、西風が Destroyer であるとともに Preserver の役割をも担っていることに期待しながら、詩人は Scatter . . . my words among man kind と述べる。詩人の言葉がどのような種類のものであるかは、Be through my lips to unawakened earth / The

疾風かぜの中の詩人： Coleridge と Shelley の ‘Aeolian Harp’ を読む

trumpet of a prophecy という預言的な趣を示す詩行によってある程度の想像がつくが、ここでは Shelley がどのような思想的背景の持ち主であったか、という情報も有益であろう。

Shelley は学生時代に無神論者として大学から追放された経歴を持つ、ある種の革命家であり、イギリス政府から目を付けられていた。Shelley は自家用船の事故で亡くなったが、これは暗殺であった、という推測もある。いずれにせよ、Shelley はある種の社会改革を目指しており、その思想は必ずしも容易に社会に受け入れられるようなものではなかったため、*Ode to the West Wind* の社会への流通を梃子として、思想的な面でも社会的な認知を求めようとしていたと考えられる。「冬来たりなば、春遠からじ」とも訳される有名な最終行には、詩人の様々な意味での再生への願いが込められていると考えられる。